

# 神の国は十字架と共に

ルカによる福音書 17 : 20 - 37

17:20 ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。17:21『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」17:22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。17:23『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。17:24 稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。17:25 しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。17:26 ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。17:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。17:28 ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、17:29 ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。17:30 人の子が現れる日にも、同じことが起こる。17:31 その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。17:32 ロトの妻のことを思い出しなさい。17:33 自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。17:34 言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。17:35 二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」17:36 \* 畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。17:37 そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」

世界には苦しみが満ちており、わたしたちもそこに巻き込まれています。先日、日本の子どもの16パーセントが貧困ラインを下回っていると報道されました。中流意識のわたしたちも、貧困の不安を抱えています。これはほんの一例に過ぎません。様々の不幸が世界に満ちています。こうしたものを見るにつけ、聞くにつけ、人事でないと感じ、また体験するにつけ、「御国を来たせたまえ」という祈りはわたしたちにとって切実な祈りとなっていきます。

ファリサイ派の人々…彼らは民衆を指導する立場にあったわけですが…彼らも、神の国を切実に求めていました。しかし、「神の国はいつ来るのか」という彼らの問いに対して、イエスは「実に、神の国はあなたがたの只中にあるのだ」（21節）と答えられました。イエスは、ファリサイ派とはまったく別の見方で神の国というものを見ておられるようです。

イエスが初めて故郷で宣教を開始されたとき、「この聖書の言葉（つまり神の国の預言ですが）は、今日、あなた方が耳にしたとき、実現した」とおっしゃいました（ルカ4：21）。そして、それを傲慢さと受け止めた人々から反感を買います。またあるときは、狂人扱いされ、「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなた方のところに来ているのだ」ともおっしゃいました（ルカ11：20）。神の国はわたしと共に既に到来している。これがイエスの教えです。実際、イエスとの出会いによって、病を癒されるだけでなく、生き方全体が新しくされた人々、つまり救われた人々もありました。ファリサイ人がこの質問をしたときは、一人のらい病人が、癒され、そればかりでなく重くのしかかっていた民族差別の相（さが）からも解放されるという出来事が起こったばかりでした。この小さい一人の救いが、どんなに大きな喜びを天にもたらすのかということが（ルカ15：7, 15：10）、ファリサイ派の学者には見えない。見れども見ず、聞けども聞かず（マタイ13：14他）、ということがここで起こっているのです。

みんなが幸せになる世界、神の国、それは人々が思い描いているものとは違うようです。そこには、「見えない」という一つの特徴があるのです。「人の子の日を一日でも見たいと望む日か来る。しかし、見る事はできない」「見よ、ここだ、あそこだ」と言っても、それは違う（22～23節）。人々には神の国が見えない。それはイエスの嘆きでもありました。エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない（19：41-42）」。神の国がここに確実にあるのにあなた方には見えないとおっしゃるのです。

どうして見えないのか。それは人々が見たいと願うようなものとは違っているからです。それは苦痛がなくなる世界ではない。むしろ苦痛と共にある世界だからです。「しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている（25節）。」多くの苦しみ、排斥・・・こうしたことなしに神の国は存在しない。小さくされること、低くされること、否定されること、命を失うこと（33節）・・・こうした苦難なしに神の国は存在しない。これはルカ福音書が一貫して述べる神の国の姿です。

先週、「神の縮み」という考えを矢口さんの説教でうかがいました。神は全能であることをやめること、つまり小さくなることのできるほどに全能である。この神の縮みというユダヤ教の伝統、これをわたしは、単に能力を行使しないというだけでなく、無能、無力となり苦しみにいたるまで縮む、神ご自身が人となり、十字架の極みにまで縮まれたと理解してよいのではないかと思います。神の国は、十字架を負う神と、自分の十字架を負ってその神に従っている一群の人々の中に、実現しているのです。

キリスト教はこれを「神の卑賤」という言葉を使って現してきました。わたしたちは、神の謙遜という具合に理解しがちです。本当に神が弱く愚かで、悩み、苦しみ、人に見捨てられ、神に見捨てられるような、そんな惨めな姿になろうとは思ってもよらないのではないのでしょうか。神の子イエスは、人から不当な仕打ちを受けて苦しむということはあっても、自分の至らなさで苦しむことなどない。イエスは後悔などなさらない。そう思っていないのでしょうか。しかしそうではありません。旧約聖書には、後悔する神が描かれています（創世記6章以下、サムエル記上15：10～34）。後悔する神。それは全知全能、完全無欠の神ではなく、人間の愚かさに翻弄されつつもことん付き合い、嘆き苦しむ神、それほどまでに人間を愛する神なのです。聖書には、イエスは黄泉にまで下られたとあります（ペトロ3：19）。それはこの世のありとあらゆる苦しみをキリストは知っておられるということです。貧困ラインを下回ることもたち。給食費を滞納していても、それが口にできる唯一の食べ物であることもたち。虐待され、何ヶ月も風呂に入れてもらえず、脳が発育せず、落ち着いておられず、人を信頼できず、迷惑行為を繰り返す子どもたち・・・こうした苦悩を神もまた引き受けておられる。これが「わが神わが神何ゆえわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ15：34他）という言葉が福音書が抹消しなかった理由です。人類ただ一人神に棄てられた人、イエス。この苦悩に部分的に与かりながら生きるように選ばれたことを自覚する者、それがキリスト者です。

聖書を読む現代のわたしたちは、見えないものを見えるようにされています。自分の十字架は、ぶどうの枝のように、イエスの十字架につながっていて、このようにしてイエスと共にいることで、神の国は実現している。もっと言えば、神は、イエスの姿をとって、重い重荷にあえいでいるわたしたちに駆け寄り、わたしたち自身のものでしかなかった苦しみを、一緒に抱えてくださった。しかもその重い方を抱えてくださった。これが神の国だということです。

一緒に十字架につけられた罪人に向かってイエスは言われました。「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる。」（ルカ23：43）わたしは、あなたと共に十字架にかかるためにやってきたのだ。人類ただ一人神に棄てられた人、イエス。そうすることで神に棄てられた人の手をつかんだ神。この地獄の中で、共に十字架を背負う二人、ここから天国は始まったのです。